

## 松井二郎による社会福祉理論研究の再検討

### —その理論的特徴・限界・現代的意義—

北星学園大学 伊藤 新一郎 (5419)

キーワード：松井二郎、社会福祉理論、福祉国家

#### 1. 研究目的

社会福祉学界における社会福祉理論研究（以下、「理論研究」）は停滞・閉塞状況にある。例えば、日本社会福祉学会の機関紙『社会福祉学』に掲載された原著論文について、「社会福祉理論」をタイトルに含むものあるいはそれを意図するものは極めて少ない。それは、この間理論研究が行われていなかったことと同義ではない。しかし、社会福祉研究の総本山である学会機関紙を見る限り、現状が楽観できるものではないと感じるのは筆者だけではないはずである。

理論研究の停滞・閉塞状況への懸念は、近年に生じたものではなく、四半世紀以上前あるいはそれ以前から複数の理論研究者より指摘されていた。その一人が松井二郎である。松井は著書『社会福祉理論の再検討』（1992）において、理論研究が「停滞・沈滞化の一途をたどりつつある」と評し、学界の状況への危機感も表明しながら、時代に即した新たな社会福祉理論を構築する必要性を述べ、自らの挑戦ともいえる研究成果を学界へ示した。

本研究の目的は、松井二郎による社会福祉理論研究について批判的視点も入れながら再検討することを通じて、その理論的特徴（到達点）・限界に加え、現代的意義を明らかにすることである。松井が示した見解に対する考察や評価を行った先行研究は複数あるが、多くの場合、松井による主張の要点紹介が中心であり、その理論研究者としての基本的立場を含めたより包括的・多角的な考察・評価をしているものは見当たらない。松井の理論研究について改めて考察することで、今日、停滞が続いている当該研究の新たな展望・可能性を拓く一助としたい。

#### 2. 研究の視点および方法

本研究は文献研究であり、研究の視点および方法は次の2点である。第1に、松井の研究業績を概観することで、社会福祉研究（社会福祉学）に対する基本的認識・立場を確認することである。これは、理論研究者としての松井の立ち位置を定位する上で重要と考えられる。

第2に、松井の研究業績より理論研究に連なると考えられるものを中心に、それらの論旨とそれを支える理論構成・構造について批判的視点を含めてレビューを行う。この作業により、松井による理論研究の特徴（到達点）・限界・現代的意義を考察することができるだろう。

#### 3. 倫理的配慮

本研究は、（一社）日本社会福祉学会の「研究倫理指針」を遵守している。

#### 4. 研究結果

松井は「1982年論文」において、「社会福祉学」が通常科学から遠い位置にあると述べ、新たな福祉論パラダイムの必要性を指摘した。その上で、「政策論体系」と「技術論体系」のそれぞれが依拠する科学方法論（構造機能分析とマルクス主義）のレベルから検討を行うことで、その理論的課題を整理した。加えて、新たな福祉論パラダイムの整備にあたって、社会システムの定常＝変動一元論（個人と社会に関する適切な動的連関モデル）の必要性を主張した。

その後、松井は著書『再検討』（1992）において、社会福祉理論についての自らの定義を示し、日本を代表する主要な社会福祉理論（竹中理論・孝橋理論・岡村理論・嶋田理論）の検討を通して、社会福祉理論における「政治的なるもの」の位置づけの明確化の必要性を指摘した。さらに、社会福祉理論における社会システムの3つの構造領域（経済的なるもの・政治的なるもの・社会的なるもの）の視点を踏まえ、1980年代以降の福祉国家の再編について分析した。

「2002年論文」では、社会福祉領域への「市場原理」の浸食（福祉の市場化）により、社会福祉の固有性とアイデンティティの喪失が起こりつつあることに懸念を示し、そのような状況への批判的立場を表明した。また、日本における功利主義的人間観・社会観への対抗の不十分さに言及し、社会福祉理論の課題として「市民型福祉」に向けた構想力の必要性を指摘した。

#### 5. 考察

松井による理論研究のレビューから得られた理論的特徴（到達点）・限界・現代的意義は以下の通りである。まず理論的特徴（到達点）として、①国内の先行研究の検討から「政治的なるもの」の重要性と社会福祉制度の逆機能の可能性を提示、②福祉国家再編に対応した社会福祉理論の構築の必要性の指摘、③メタ理論としての構成、④社会福祉理論の視点からの福祉国家分析、の4点があげられる。次に限界については、①メタ理論としての性質が強く、独自の理論体系の構築の不十分さ、②1980年代までの分析が中心であり1990年代以降の分析は概括的であり精緻化の不足、③自らの基本的科学観に立った社会福祉学の構築（社会福祉理論のグラウンドセオリーの構築）への未到達という3点である。現代的意義は、①既存の理論および現実を批判的に考察する視点の重要性の示唆、②「政治的なるもの」の重要性は今日ますます高まっており、それに対する先取りの指摘、③社会福祉（理論）研究の立場からの福祉国家分析は、今後の社会福祉（理論）研究のあり方を構想する上での重要な示唆であり、福祉国家のあり方に対応した受動的ではなく、福祉国家を改革・変容させる能動的研究としての社会福祉（理論）研究の可能性を問う必要性の示唆、という3点といえる。詳細は当日に報告する。

#### 【文献】

松井二郎（1982）「社会福祉理論の体系化をめざして—諸理論の検討—」『社会福祉研究』発刊30号記念特大号，財団法人鉄道弘済会，8-13. / 松井二郎（1992）『社会福祉理論の再検討』ミネルヴァ書房. / 松井二郎（2002）「第2章 社会福祉再編期における社会福祉理論の課題」阿部志郎・右田紀久恵・宮田和明・松井二郎編『講座 戦後社会福祉の総括と二十一世紀への展望Ⅱ 思想と理論』ドメス出版，159-217.